

注目のキーワード「STEAM教育」

STEAM教育は、2000年頃より行われてきた従来の理数系教育であるSTEM教育、科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Mathematics)に、Artsを加えたものとなります。このArtsが持つ意味は、国によってもさまざまですが、日本では単に芸術というだけでなく、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた幅広い範囲(Liberal Arts)として、文部科学省では定義しています。

そして、STEAM教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」として、日本でも推進されています。具体的には、教育課程の策定基準である「学習指導要領」の2016年度改訂において、STEAM教育の考えを活かした「総合的な学習(探求)の時間」や「理数教育の充実」などが盛り込まれ、2020年度に小学校で実施されたことを皮切りに、中学校・高校でも順次実施されています。

こうした変化の背景としては、AIやIoTなどの急速な技術の進展により、社会が激しく変化している中で、文系・理系といった枠や分野を横断して考える力、新しい着眼点で物事を捉える力が求められていることなどが挙げられます。

例えば、機械が全ての運転操作を自立的に行う完全自動運転を一般の道路で実現するためには、位置特定技術や予測技術、通信技術などの科学技術の進展は欠かせませんが、同時に、事故が発生した際の責任の所在(開発者、メーカー、運転手)といった法的な観点や危険を回避する際の優先順位(乗員、通行人)といった哲学的な観点など、人文・社会科学的な視点からの課題解決力も求められます。

我々が直面する課題が多様化・複雑化している中で、各科目での学びを基礎とした上でさまざまな情報を活用・統合して課題の発見・解決に結び付けていくといったSTEAM教育が育む力は、これからの社会においては欠かせないスキルであり、その重要性は増していくものと思われます。また、こうしたスキルは学生のみならず、社会人にとっても重要なものではないでしょうか。

(総合調査部・フェロー 水澤 太一)

Side Mirror

アメリカの国債市場で2年金利が10年金利を上回る所謂“逆イールド”、が発生してからほぼ1年が経過した。よく逆イールドの発生はリセッションの先行指標と言われているが、正確に言えば逆イールドから順イールドに戻るとリセッションになるということだ。これまで“ダマシ”はなく逆イールドとリセッションはセットで語られるものだった。

FFレートが5.25%まで引き上げられてきたが、アメリカのインフレはピークをつけてディスインフレプロセスに入っているとは言われているもののPCEコアで4.7%とサービス価格中心に高止まりが続いている。一方、失業率は歴史的低水準の3%台を維持、更に失業者を大幅に上回る求人数も維持、賃金上昇率も5%台で実質賃金もプラス圏と好調を維持している。株式マーケットは2020年の金融相場から2021年の業績相場、2022年の逆金融相場を経て2023年は逆業績相場に怯えたものの企業の利益見通しは思いのほか悪くない。逆業績相場は終わったのでは?という人もいる。

こうした状況からリセッションなしのソフトランディングシナリオが台頭してきている。確かに急激な引締め割には経済の減速は緩やかだし、インフレは着実に減速に向かっている。しかし個人的には本当?と言いたくなる。インフレにもかかわらず実質消費が落ちてないのは2020年以降の財政支出が相当効いているのではないのか?企業は値上げしても数量が落ちないことから利益を維持できているということではないのか?つまり個人消費のバッファがなくなれば経済は急激に悪くなるのではないのか?

「いやいや今回は違う。今回は債券市場は心配し過ぎだ」。そんな声も聞こえてくるが、どうだろうか。投資の世界では“今回は違う”というのは最も避けるべき考え方とも言われてきた。世界で最も合理的で流動性が高い米国トレジャー市場のサインはまだ無視できないと思うが。

(佐久間 啓)